

令和5年10月30日

令和5年度大田区青少年問題協議会
(第2回)

令和5年10月30日

午後2時00分開会

○今岡地域力推進部長 本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。令和5年度第2回青少年問題協議会を開催させていただきます。

私は、地域力推進部長の今岡でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

この協議会は、公開原則に則りまして、傍聴制度を導入しており、区ホームページにて本会議録の公開を予定しております。

まず、開会にあたりまして、本協議会の会長であります、鈴木区長よりご挨拶をお願いいたします。

○鈴木区長 皆様、本日もお忙しいところをご出席賜りまして、ありがとうございます。

委員の皆様には、日頃より大田区の青少年健全育成にご尽力を賜り、深く感謝を申し上げます。第1回青少年問題協議会では、「次期大田区子ども・若者計画策定に向けた方向性の整理について」をテーマに、皆様より様々なご意見やご提案を頂戴いたしました。日々一人一人のこどもと向き合ってきていることに、改めて感謝申し上げます。

さて、こども家庭庁では、9月下旬にこども大綱の中間整理をまとめました。こども大綱は、少子化対策、こどもの貧困対策、こども・若者育成支援の三つの大綱を一本化するもので、こども政策の基本的な方針や重要事項を定めるものでございます。

中間整理には、こどもや若者の利益を第一に考える、「こどもまんなか社会」の実現を目指して、「こどもを権利の主体として認識し、最善の利益を図る」をはじめとする、六つの基本方針が盛り込まれました。

また、こどもの誕生から青年期までの重要事項をライフステージ別に提示し、例えば、学童期・思春期においては、居場所づくりや成年年齢を迎える前に必要な知識の情報共有等が提示されています。

今後、子育ての当事者や小中学生からも意見を聞いた上で、今年11月に最終案を取りまとめるとのことです。大田区では、引き続き、こども家庭庁の動向に注視し、こども・若者施策を進めてまいります。

本日は、第2回となる青少年問題協議会におきましても、誰一人取り残さない、笑顔と温かさあふれる大田区であるよう、そして、全てのこども・若者が夢や希望を抱き、健やかに育つための支援施策について、さらなる検討を進めていくため、委員の皆様

には、引き続きご協力をお願いいたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。
よろしくをお願いいたします。

○今岡地域力推進部長 ありがとうございます。

お手元に配付いたしました資料のご確認をいたします。

まず、本日の次第。

資料1、大田区青少年問題協議会委員名簿

資料2、令和5年度第1回青少年問題協議会で挙げられた委員のご意見と現計画の
位置づけ

資料3、大田区子ども・若者計画抜粋

資料4、コミュニティ・スクールの推進について。

最後に座席表となります。

それでは次第に戻りまして、委員のご紹介でございますが、改めましてお手元の資料1をご覧ください。本来であれば、お一人おひとりご紹介させていただくところでございますが、会議の簡略化のために、恐縮ですが、資料1の名簿にて代えさせていただきます。

また、本日は審議内容に関係しております、教育総務部の職員が参加しております。後ほど発言をさせていただきます。

それでは、これから議事に入ります。

進行につきましては、座長の永井先生にお願いしたいと存じます。永井先生、お願いいたします。

○永井座長 それでは、前回に引き続き、司会を務めさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。これから議事に入ります。

まず初めに次第3にあります、第1回青少年問題協議会の議事概要及び審議内容における現行大田区子ども・若者計画の確認について、青少年健全育成担当課長からご報告をお願いいたします。

○竹田青少年健全育成担当課長 それでは、資料2に沿いまして説明をさせていただきます。第1回の青少年問題協議会を7月7日に実施しました。年間テーマの「次期大田区子ども・若者計画策定に向けた方向性の整理について」につきまして、委員の皆様からたくさんのご意見をいただきました。

資料の2をご覧ください。A3の横の資料になります。資料は、第1回青少年問題協

議会で委員の皆様からいただいたご意見と子ども・若者計画の位置づけについてまとめたものです。

年間テーマを「次期子ども・若者計画策定に向けた方向性の整理」としていることから、第1回の協議会で委員の皆様から挙げられたご意見が、現在の子ども・若者計画にどのように位置づけられているかをまとめ、表の左から1列目に表示しました。

上の行から順に振り返りますと、

1つ目は、コミュニケーションを豊かにしていく取組

2つ目は、こども・若者が、地域に参画できる仕組み（組織）づくり

3つ目は、適切な広報の仕方の検討

4つ目は、地域団体への支援、ネットワークの整備

5つ目は、保護者への情報提供（こども・若者が巻き込まれる犯罪や社会状況について）

6つ目は、関係機関との連携、支援体制整備

これらの内容が、子ども・若者計画のどこに位置づけられているかについて、表の左から3列目、子ども・若者計画の位置づけに表しました。

例えば、1番目のご意見、「SNSの普及によりコミュニケーションが変化している。コロナ禍で行動制限を受けたこどものコミュニケーションをどう豊かにしていくかが課題と思う」といった、コミュニケーションを豊かにしていく取り組みについては、子ども・若者計画の「個別目標1-4 コミュニケーション能力の向上を図ります」に位置づけられており、リーダー講習会や子ども交歓会、国際理解教育の推進といった事業の中で進めていることが分かります。

このように、ほかのご意見についても、現在の計画との関連を見ていただきますと、現在の子ども・若者計画の中で位置付けられていることを確認していただくことができます。

また、お配りしている資料3をご覧ください。こちらは、皆様にいただいたご意見に関連する子ども・若者計画の該当するページを抜粋したものです。併せてご確認いただきたく思います。

私からの説明は、以上です。

○永井座長 ありがとうございます。大田区の子ども・若者計画というのは、こども・若者施策に必要な支援内容は、非常に広く網羅されておりますので、皆様からのご意

見やご提案が、この計画の中のどの項目に位置付けられているのかを見ていただくことができたのではないかと思います。

しかしながら、皆様の思いを計画に落とし込んでいくためには、皆様からのご意見やご提案を今後、より掘り下げていく必要があると考えております。資料2及び3のご報告に関して、委員の皆様からご意見やご質問などありましたらご発言をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

ご説明いただいたように、非常に網羅的に内容が整理されているので、計画の上では、それぞれご指摘いただいたようなことも、子ども・若者計画の中の個別目標として対応を指摘することができると思います。関係している、あるいはご関心をお持ちの方で、実際はこういう点でとてもうまくいっている、計画上はこう位置付けられているけれども、もう少し検討していく必要があるのではないかというようなことがあれば、ぜひご発言いただきたいと思います。

では、曾田委員にお願いいたします。

○曾田委員 曾田でございます。資料2の3番の若者サポートセンターについて掲載されているところで、重点事業として、インターネットを活用した自殺防止相談事業が掲げられています。これは非常に重要な施策だとよく分かっておりますし、自殺防止のためにインターネットや電話で相談ができることが非常に効果を上げていると理解しています。けれども、もう少しこれを広げて、自殺するところまで追い込まれなくても、例えば、学校でいじめに遭っている、あるいは学校に行きたくない、不登校の状態にある、家庭がこどもの居場所じゃなくなっていることは少なくないと思います。

そういう困ったこどもたちが、相談を受けられるよう、この範囲を自殺防止ということだけではなく、こどもの困り事の相談窓口のように、もう少し広げられたらよいじゃないかとちょっと感じました。

以上です。

○永井座長 ありがとうございます。これについては、何かご説明はありますか。

○竹田青少年健全育成担当課長 困り事の相談窓口ということでお話をいただきましたので、昨年10月31日に、大田区若者サポートセンターフラットおおたを開設しました。こちらは、15歳から39歳までの子ども・若者が、誰でもふらっと立ち寄ることができ、何か心配事があった際に相談もできる、加えて落ち着くことができる居場所も設けている、そのような総合相談窓口でございます。

こちらは明日で開設して1年を迎えます。令和4年10月から令和5年9月末までの数字になりますが、相談は延べ件数で1,700件。居場所については、延べ件数で2,300件もの方にお越しいただき、相談事業や居場所を活用していただいている事実がございます。

ただ、こちらの窓口は開設をし、じわじわと浸透をして皆様にご利用していただいておりますけれども、まだ、施設を知っていただくことができていない方たちもいらっしゃいますので、引き続きPR・周知を進めていく予定で進めています。よろしくお願いいたします。

○永井座長 ありがとうございます。よろしいでしょうか。

○曾田委員 インターネットを使うことが、非常にアプローチしやすいと思います。もちろん、フラットおおたが素晴らしい事業で、効果を上げていることはお聞きしています。けれども、インターネットで気軽に聞けるような状態にすることについても少し検討していただければと思います。

○今岡地域力推進部長 地域力推進部長でございます。健康政策部の取り組みですが、例えば、インターネットなどで「死にたい」「いじめ」などのキーワードを検索された方に、区から「どうしましたか」というようなメールを送り、相談につなげる仕組みを区では取り組んでいるところがございます。

それから、先ほど、課長が申し上げた新しくオープンしましたフラットおおたにつきましても、そういったメールやチャットといった、最初は匿名でも相談できるような形もございますので、そういった形でうまくキャッチできるような仕組みは作っているところがございます。

ただ、それで十分とは思っていませんので、皆さんもご承知かと思いますが、ゲートキーパー養成講座など、そういった取り組みも進めているところがございます。

つい先日も、庁内で検討会を開きまして、健康政策部や福祉部、子ども家庭部といった関連部局とよく連携を取りながらやっていこうということを改めて確認しているところがございます。

ご意見、大変ありがとうございます。さらに進めていきたいと思っております。

○永井座長 ありがとうございます。ほかには、何かご質問・ご意見等ございますか。何かありましたら、後ほどご発言いただいても結構でございます。

それでは、これから、次第4に移らせていただきます。

今年度のテーマは、次第に記載されておりますとおり、「次期大田区子ども・若者計画策定に向けた方向性の整備について～子ども・若者と地域を結ぶ、支援体制整備を目指して～」となっております。

皆様にご審議していただくにあたり、初めに、大田区が力を入れておりますコミュニティ・スクールについて、お話を伺うことができればと思っております。コミュニティ・スクールでは、学校と地域住民が力を合わせて子どもたちのより良い環境づくりに取り組んでいるということでございます。本日、ご出席いただいている教育総務課の皆様は、コミュニティ・スクールについて、内容や現在の取組状況等を教えていただけたらと思います。

○長岡教育総務部教育地域力担当副参事 教育総務部教育地域力担当副参事の長岡です。

本日は、貴重な時間をいただき、誠にありがとうございます。私どもからは、コミュニティ・スクールについて、お話をさせていただければと思います。

本日は、今年度から教育総務課に配置しております教育地域力推進コーディネーターもこちらに同席させていただいております。こちらが、コーディネーターの和光でございます。そして、隣が柏葉でございます。それから、コミュニティ・スクール推進においては、深谷社会教育主事にも尽力いただいております。

それでは、お手元でございます「資料4 コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)の推進について」をご覧くださいければと思います。

「1 コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)とは」に書いてありますとおり、コミュニティ・スクールというのは、学校の中に学校運営協議会というものを設置した制度でございます。

「2 これまでの学校支援体制」を見ていただきますと、これまでも大田区は、学校を地域で支える仕組みとして、学校の中に地域教育連絡協議会、そして、学校支援地域本部を設置し、学校を地域で支える仕組みというのをつくり上げてきたところですが、右上の3に記載されておりますとおり、国の学校運営協議会制度に則り、地域教育連絡協議会を発展的に解消し学校運営協議会を設立し、学校支援地域本部を地域学校協働本部と名前を改めました。この学校運営協議会と地域学校協働本部の協働をしっかりと位置づけたコミュニティ・スクールを全校に展開していきたいと考えています。

この学校運営協議会では、今まで、連絡協議会であったのを運営協議会と改めており、

校長先生がどのような学校をつくりたいか、児童・生徒のどのような面を伸ばしていきたいか、そのために学校の現場が、現在どのような課題を抱え、どのような策を立案しているか、これまでも増して熱弁がなされてきました。それに呼応しまして、様々な視点や発想、こどもたちの目線に立った意見などが出されております。さらに、地域の特性に応じて求められる教師像や、将来、地域の中で先生になりたいと考える人材をどうやって育成支援するかというところにまで及んでいる協議会もございます。

コミュニティ・スクールが浸透し、充実していくことによって、教員の働き方改革から授業を充実させること、将来の地域の担い手の育成、そして、こどもの笑顔や親子での地域参加など、様々な効果を期待して推進に取り組んでいるところです。

本日せっかくの機会ですので、理念的な話だけではなく、今年度から配属されました、教育地域力推進コーディネーターの二人に、実際の議論のご様子ですとか、学校運営協議会と地域学校協働本部とか、協働してどのような取り組みをしているか、トピックをピックアップしながらご報告させていただければと思います。

では、和光コーディネーター、お願いいたします。

○和光教育地域力推進コーディネーター 皆様こんにちは。教育地域力推進コーディネーターの和光です。よろしくお願いいたします。

私からは、コミュニティ・スクールを導入した2校をご紹介します。一つ目は、久原小学校です。久原小学校は、本年度130周年を迎えるにあたり、昨年度の学校運営協議会から熟議しておりました。

地域の思いを優先し、協議会委員が意見を求めたところ、今の児童、保護者、学校が主体となったイベントになればよいという意見や、私たちはお祝いしたい気持ちがあるから、そのために自治会も協力は惜しまないという意見が挙がりました。

そのため、130周年記念「夏休みドキドキ学校」では、協議会委員の協力もあり、書道家の金澤翔子さんをお呼びして、特別講座を開催しました。参加した3、4年生のこどもたちが、目の前で見ると大きな筆に実際に触れて、持たせてもらったときには、大きな歓声が上がっていました。反対に、飛翔の文字を書くときは、一言もしゃべらずに真剣な目で見えておりました。その後、質問タイムでは、たくさんのこども達が手を挙げ、言葉に詰まったこどもには、翔子さんが頑張ると声をかけていました。前向きに、どんなときも諦めない、一つのことを続ける大切なことを受け取ったと思います。

そうした、それぞれの思いを受け取り、「地域の思いをつなげます」と大きな声で宣言していました。コミュニティ・スクールから地域に根付いたこどもが育っています。

二つ目は、雪谷中学校です。コミュニティ・スクールを導入したことで、新しく生徒会と学校運営協議会委員による雪中祭を協議し、生徒会主導で企画・運営・実行しようとしております。

生徒会は、自分たちでアイデアを何かつくりたいと思っていて、学校運営協議会の委員は、コミュニティ・スクールとなって、こどもたちを中心とした活動をしたいという思いがあり、学校の思いは、学校経営計画に生徒が、生徒自身の発想や企画による活動を通じて、達成感や自信を持つことができるような機会を積極的に創出するとあり、生徒たちに自主的な活動をさせたいという思いがありました。その三者の思いがコミュニティ・スクールでつながりました。

生徒会の1、2年生が中心となって、学校と学校運営協議会がサポート役となり、企画会議を繰り返し、生徒の提案で大きな鯉のぼり大作戦、雪中祭、学校バンクシー、自分たちで作るマスコットキャラクターなどのアイデアが出ました。

今回は、実現しませんでした。学校バンクシーのアイデアは、学校にこっそりと芸術作品を描こうという大人が驚く発想で、10個ものアイデアを持ってきた、2年生の女子生徒による、自由な発想から生まれたものでした。

このアイデアの中から、今年度は、雪中祭に決め、開催目的もみんなで出し合い、みんなの協調性が高まる、人と会話することでお互いに新しい気付きがある、自分たちで作り上げる力を付ける、他学年との交流をもとに、みんなで一つの目標に向かい、達成感を味わうことで自信につながるなど、生徒会長がまとめて職員会議に持ってきました。

今後は生徒総会で発表し、地域交流問題の解決として、総合的な学習の時間を使い、各クラスの企画を考えます。お化け屋敷、脱出ゲーム、モグラたたき、射的などの出し物を用意して、午前中は生徒同士、午後は雪谷小学校の児童と地域の方も呼び出して開催します。

また、広報のやり方について校長先生と相談し、雪谷小学校の児童数分印刷をし、持参することとなりました。地域配付分は、学校運営協議会で協議し、自治会回覧で配布することとなりました。

コミュニティ・スクールが始まり、生徒が自発的にゼロから作り上げ、主体的に行動

し、生徒会から生徒全体に波及し、探究心を持って地域に還元し、問題解決能力の向上と学力向上につながっています。

私からは、以上です。

次に、柏葉コーディネーターから学校運営協議会と地域学校協働本部との協働の取組について、ご報告いたします。

○柏葉教育地域力推進コーディネーター 私からは、今年4月からコミュニティ・スクールとしてスタートした中萩中小学校、東糶谷小学校、そして、この9月からスタートした羽田小学校について、ご報告させていただきます。

まず、中萩中小学校の特徴は、東京都のコミュニティ・スクール研修会に全て参加している地域学校コーディネーターが学校運営協議会の委員となり、様々な活動の見通しを持って、地域学校協働本部での協働の取組を考えていることです。

つまり、学校運営協議会が人材発掘をし、コミュニティ・スクールを活性化しているのです。このコーディネーターは、チーム中萩中という学校運営協議会だよりを作り、会議の内容はもちろん、今現在、どんな活動が始まっているのかを伝えるなど、各学年の総合的な学習の時間に深く関わっています。

また、地域学校協働本部の具体的な支援内容について、このようなお手伝いができますというチラシを全教職員に配付し、キャリア教育や家庭科ボランティアなど、具体的な活動につなげています。このコーディネーターは、教育委員会が主催した各校新任コーディネーターのための地域学校協働活動研修会でも中心となり、大変分かりやすく現状報告をしてくださいました。今やスーパー地域コーディネーターと呼ばれています。

実際、夏休みのわくわくスクールでは、無料で教えてくれる講師を一生懸命探し、何度も相談し、日本財団「海と日本プロジェクト」を見つけてくれました。この財団は、SDGs とプログラミングが学べる、STEAM出前授業を企画している団体です。実施した講座は、「Scratchで動かす海の生き物たち」でした。

1年生から4年生までの19人が魚について学び、自分の好きな魚の下描きをした後、小麦粉粘土を使って小さい実物の魚を作りました。その後、出来上がったお気に入りの魚を画像データでパソコンに取り込み、Scratchへと進んでいきました。自分で作ったカラフルな熱帯魚が、自分で考えた動きをしたとき、やったと大喜びしていました。SDGs NO.14「海の豊かさを守ろう」について再確認し、海洋調査な

ど、プログラミングを使うと出来ることが増える。そういう良さも学んでいました。

次に、東糀谷小学校です。特徴は、東糀谷小学校を卒業した大学生が、学校運営協議会の委員になっていることです。第1回運営協議会での自己紹介で、「今後の方向性について。自分のできることを精一杯やってみたい。特に、若い世代への情報発信についてSNSを通して積極的に取り組みたい。夢は、母校の先生になることです」と自分の思いを熱く語り、会議全体が盛り上がりました。

その思いが伝わり、夏休みわくわくスクールの夏祭りでは、東糀谷小学校を卒業した制服姿の高校生が、輪投げコーナーを担当していました。終わった子どもたち一人ひとりに3種類のジュースから1本選ばせ、子どもたちも笑顔で「ありがとうございます」と言って帰っていきました。卒業生の後輩たちへの優しい思いが伝わり、多くの子どもたちの笑顔の活動につながりました。

地域学校協働本部、わくわくサポート東糀谷は、7月に地域の方々をお願いして、全校児童に盆踊りを指導していただきました。町会からは、わくわくサポート東糀谷の皆さんの学校に対するお手伝いが素晴らしいという声もいただきました。

最後に、羽田小学校です。校長先生は、この4月に昇任して着任したばかりの方です。しかし、その熱い思いで、地域、保護者、教職員を動かし、120周年イベントをまとめ上げ、その後一気にコミュニティ・スクールを立ち上げました。

大変協力的な地域で、保護者、地域が一体となっており、教職員も地域に支えられていることに大変感謝していました。夏休みわくわくスクール2023の講師も、地域の回覧板で募集し、実現しました。

このように、開校120周年に向けて、学校、保護者、地域の思いが一つにつながったことで、コミュニティ・スクールのスタートに向けて勢いが付けることができました。

先日、9月30日の羽田空港の空の日フェスティバルでは、4年生全員が大江戸ダンス2023を多くの方々の前で、各町会のダボシャツを着て、どの子も誇らしい顔で元気に披露することができました。

また、例えば、今日ご紹介した方々にぜひ会ってみたい、話を聞きたいということがありましたら、お声をおかけください。

以上でご報告を終わります。

○永井座長 ありがとうございました。大変興味深く拝聴しました。

このコミュニティ・スクールについて、大田区の全学校に推進していくということですが、これについては、小黒教育長、いかがでしょうか。

○小黒教育長 コーディネーターや副参事から説明しましたとおり、大田区の教育は、タブレットの活用など様々な課題があります。けれども、これからの大田区の学校教育を考えたときには、このコミュニティ・スクールが大変重要なものだとは考えています。

地域と共にある学校づくりということで、説明した内容と重なりますが、こどもたちの状況を見ていると、孤立など様々な課題がありますが、それを支える人がいることがとても大事と思っています。

このコミュニティ・スクールは、最終的には、地域とこどもたちがつながっていくことが目標です。その中でこどもたちを育てていこうという考えです。

学校は、教育の専門機関として、先生がいて教育課程があります。しかし、不登校の問題だとか、自殺の問題だとか、学校の組織だけ、先生たちだけでは、補い切れない課題があります。さらに、教員の働き方改革も言われており、日本の教育環境は変革が求められています。学校のみで対応するのは限界があり、地域の方々の力をお借りする必要があります。

地域といっても、それぞれ特色があります。そこに住んでいる方がいて、そこで起業している方がいて、それがやっぱりその地域の特色となります。説明しましたとおり、羽田は、羽田の特色がありましたし、久が原は、久が原の特色が、その地域に住んでいる人たちとどうこどもたちをつなげていくのか。つながることで、こどもたちが育っていき、地域の人たちに元気になってもらうことを考えています。

これからは学校が学校だけで考えていく時代ではありません。それがSDGsにつながります。大田区の将来のことを考えた際も、今のこどもたちが、地域の方々にたくさん関わって、地域っていいな、温かいなって思いを持って成長することが、将来の大田のまちづくりに一番つながっていくと考えています。

私も、先ほど久原小学校の金澤翔子さんのお話がありましたけど、行って見てきました。それから、先日の土曜日に松仙小学校でも周年行事に、金澤翔子さんをお呼びし、実際に書いてもらいました。

とても大きい筆で、まさに気迫に満ちて書を書き、その後、マイケル・ジャクソンのダンスを踊ります。書を書いているときと踊っているときは本当に対象的で、そうか

金澤翔子さんは人を楽しませてくれる人ということが理解できました。

地域には様々な人材がいます。それが、こどもたちが将来、生きていくときのいい材料を与えてくれます。それを発掘して、地域でつないで、そういう場をなるべく多く持って、こどもたちがこの地域で本当に育って良かったな、こういう人たちがいたのだということが生きていく力になる。そういうつながりができる、そういう活動ができるのが、コミュニティ・スクールです。

ですから、今、コーディネーターが言ってくれましたが、活動を通して、こどもたちのこれからの幸せにつながるだろうし、地域の活性化につながっていくと考えています。今年中は17校ぐらいですけれども、大田区は88校あります。これに、徐々に広げていって、その学校ならではのコミュニティ・スクールが出来て、先生方も、保護者の方々も、地域の方も一緒になってこどもを育てていく、地域のそういう活動の核になっていく。そういうような学校づくりを進めていきたいなと思っています。

○永井座長 ありがとうございます。今、小黒教育長がとても重要なことを指摘してくださったと思います。それは、地域のひととこどもたちがつながることがすごく大事なのだということで、結局、コミュニティ・スクールということは、学校を核として家庭と地域、それから、学校がもちろんつながっていくこと。そこで、学校にも、あるいは地域にもメリットがあるということだろうと思います。

それで、こどもたちにとっても、小さい頃から学校活動の中で地域と自然に関係性を持つということが、将来の地域の中の様々な活動の担い手の育成という面でも、逆に、学校での活動が地域を支えていくという方向性も、可能性としては十分あるということとです。

学校を取り巻くその組織として、PTAというものが伝統的にございますが、アメリカのPTAは、最近子ども（Student）を入れて、PTSAにするというような動きも報道されています。先ほどの雪谷の例も少しPTSA的な活動のように思えます。

それから、アメリカのPTAの中には、PTAという名前だけれども、地域の中の大人で、お子さんを学校に通わせていないような大人の方もPTAに参加する例が、比較的多いということなので、そういう形で似ている面もあると思います。その辺りも含めて、どのように具体化していき、成果を上げられるのかを、とても興味深く見ていきたいなと思っております。

大田区では、学校のほかにも各地域団体の皆様が、積極的にこどもの健全育成に努めてくださっています。こどもたちを全体で捉えますと、三つに分けられます。一つはリーダー講習会等の地域の活動に積極的に参加するようなこども達です。

それから、もう一つは、悩み事や困り事を抱えていて、例えば、フラットおおたを利用するような、こどもや若者です。

最後に一番マジョリティなその間でリーダー講習会等に参加するわけでもなく、フラットおおたのような所にも関わっていない、学校に通っており大きな問題を抱えていない、こどもたちです。

リーダー講習会に参加するような人たち、あるいはフラットおおたを利用するような若者・こどもたちは、青少年問題協議会や地域・区と接点があるわけですがけれども、その間にいるこどもたちとは、なかなか接点が持ちにくい。そのことは、これまでもこの青少年問題協議会で何度も議論されてきたところです。

来てもらいたい人は、なかなか来てくれないというところで、どうしたらいいのだろうということは、常に問題視されてきたわけですがけれども、そういう将来の担い手を増やしていくためにも、これからのこどもたちへの働きかけが重要となります。地域へ関わってもらうためには、どう働きかけていけばいいのかということが課題になるかと思います。

コミュニティ・スクールというのも、一つの方向性であると捉えることはできます。地域に関わってもらうためにどう働きかけていけばいいのかということに、少し焦点を当ててお話を伺えればと思います。

まず、地域のイベント等で活動されている地域団体の皆様に、順にお伺いをさせていただければと思います。こどもたちの地域参加について現状を把握するために、何点かお話しただけならと思っています。例えば、どのようなこども・若者がイベントに参加しているのか、それから、これまでイベントに多くの方に参加してもらうためにどのような工夫をしてきたのか。あるいは多くの方に参加してもらうためには、どのような工夫をされて、うまくいったことがあるだろうか。あるいは逆にうまくいかなかったことがあるだろうか、それはどんなことだったか。少しまとめると、マジョリティの部分のこども・若者が、地域とつながらないことの問題はどこにあると思うか。あるいはマジョリティに届く工夫ができそうなのか、どんなふうにしたらいだろうか。その辺り、具体的な活動を重ねていらっしやいます委員の皆様に、お伺いを

させていただきたいです。まず、最初に自治会連合会の三木委員、いかがでしょうか。

○三木委員 自治会連合会の三木です。どのようなことを理事会として、子ども・若者たちにしているかということで、地域として、やはり子どもたちに地域の情報をいかに伝えるか、これが一番大事なところではないかと思います。例えば、久が原地区では自治会会館を、通常ですと一般貸出しの際は、子どもたちは使えないのですけれども、8月のお盆の時期は、自治会会館は休みになりますので、子どもたちの居場所づくりとして活用できないかということで、今年、テスト的に開放しました。時間は午前9時から午後5時までです。また、もう一つの自治会館にも同じようにインターネットを引いて、子どもたちの居場所という形で使ってもらうことを試しにやってみました。

小学生も対象にしようかと思ったのですけれども、休みの時期なので、会館の事務員がお盆休みでいませんでした。そこで、対象の子どもたちを中学生、高校生にし、特別出張所の職員にパソコンを持ち込んでもらい、見守りをしてもらいました。久が原地区が対象ということで大森十中、それから、雪谷高校が対象となり、お盆の時期、自治会会館を無料開放しますよという形でやったところ、3日間ですけれども、30人弱の子どもたちが集まってくれました。

そこで勉強をしたり、インターネットを使用して1日過ごしていただく。当然、エアコンも効いて涼しい。久が原地区には、久が原図書館がありますけれども、ここは普段満杯で、なかなか入れない中で、久が原会館を使えたということで非常に好評でした。

さらに、9月に久が原地区として、LINEをオープンしました。きっかけとしては、自治会の会員には、回覧板でいろいろな情報は回りますけれども、会員以外の方には、なかなか情報が伝わり切れないというところで、LINE登録をしてもらって、久が原地区の情報を得ていただくためです。

その情報というのは、当然、久が原の特色、防災、イベント等、いろいろなものを載せております。いろいろな情報を出している中で、今回、たまたま大田区でシステム障害があったのですけれども、これを久が原地区のLINEに掲載したところ、90%の方がLINEを見ていただいたことがわかり、LINEの効果があることに気づかされました。

大田区としては全体の62%、久が原地区は67%の方が自治会に登録されています。70%を切ったということに自治会は非常に危機感を持っています。いかに今

後、会員を増やしていくかということ考えたときに、その地域の情報を地域の皆さんに伝えていくことが一番大事じゃないかとなり、一つの事例としてLINEをやったりしています。

また、夏休みの居場所づくりのために中学校、高校生に対して自治会館を開放したことで、その生徒たちが今度10月1日に、久が原ふれあい大運動会というものを久が原地区でやっており、そこにボランティアとして来ていただきました。単に活用しているだけではなくて、そういうことをやることによって自分の地域とつながりを持つたという意識持ち、ボランティアとして久が原地区の運動会にお手伝いをさせていただきました。地域として一つの成功例とまではいかないのかもしれませんが、どのように子どもと地域をつなげていくかが一番大事ではないかということ、今夏のいろんなイベントを開催していく中で、自治会として一番感じたところでございます。

以上です。

○永井座長 ありがとうございます。

8月に3日間実施し、その後もいろいろな形でつながりができているということ。

ありがとうございます。

それでは、次に青少年対策地区委員会の会長会の石垣委員、いかがでしょうか。

○石垣委員 雪谷地区にもスポーツまつりというものがあります。旧自治会スポーツまつり、以前は綱引き大会でした。その綱引き大会がスポーツまつりに移行されました。

スポーツまつりには、9つの自治会が参加します。周知するために、学校の校長先生が協力してくださり、ポスター、チラシなどを各学校の生徒に配布してもらっています。雪谷地区には、小学校が6校、中学校が4校、それから保育園もたくさんあります。とてもいい環境の中に、うちの自治会も小学校もあると思います。

自治会が参加してくださっているのも、青少対だけで動くのとは異なります。自治会というものは、地域に根付いているため、おじさん、おばさんの顔をよく存じ上げています。自治会が入ってきますと、年寄りのおじいさん、おばあさん、それから子ども、若者、みんな入りますので、和気あいあいとしたスポーツまつりができています。

○榊中委員 青少年委員会会長をしております、榊中でございます。

雪谷のお話がありましたけど、まず青少年委員としての取組から、先ほど座長からお話のありました、若者がどういうふうに関わっていくのかということ、中高生、大学生、専門学校生が中心になって「Oh!!盛祭」というイベントを企画運

営していたり、また、OTAふれあいフェスタにコーナーをいただいて、そこで中学生、高校生がボランティアに参加していただきながらイベントを一緒に作ったりしております。

そういうところに来ている子どもたちを、いかに増やしていくのかということに関しては、今までは各地区のジュニアリーダーの方を中心に中高生にチラシを撒いており、結果的にジュニアリーダーをやってくれている方たちから集まってくるというのが一般的でした。

それだけでは広がらないので、実行委員の高校生が中心となって、Xといった、SNSを使って発信をしていこうと、そういったところで新しい委員を募集していく取組を行っております。2年ほど前から取り組んでいますが、残念ながらSNSを通しての新しいメンバーというのは集まってきていない現状があります。ただ、今、実行委員の方を中心に、どうすれば仲間を増やしていけるのかを若者たちが中心に考えているところでございます。

今、来てくれている方というのはどういう方なのかといったところで言いますと、大田区3地域で展開されていますリーダー講習会、リトルリーダー講習会に参加をしていた、小学生として参加をしていた方が、中学生、高校生になったときに、自分もお兄さんお姉さんのように小学生のリーダーとして頑張っていきたいという形で残ってくれており、その子たちがOh!!盛祭だとか、そういった区の大きなイベントに実行委員として参加していく流れがあります。

なので、こう見ていると、いろんなイベントに参加してくれている方を増やしていくというためには、幼い段階で、いかに地域やいろんなイベントに参加をさせて、楽しい思いをしてくれるか。そして、自分たちが楽しかったので、今度は逆の立場になって子どもたちを楽しませたいと思ってくれる子どもたちを、いかに増やしていくのかということを考えていく必要があると思います。

その中においては、青少年委員ができることというのは本当に僅かなことです。先ほどコミュニティスクールの話がありましたけれども、地域とのつながりということをおっしゃっていただきました。こういったものが増えていく中で、学校を核として地域とのつながりができていて、その学校から地域に出ていく、地域のいろんなイベントに参加する機会をいっぱい作る、それがすごく重要だと思います、そうすることで、その中からまた地域のリーダーとして頑張りたいと思う子どもたちが増えていく

のかなと思いました。

また、こどもたち全員が参加する必要はないと思います。スポーツで頑張っている方、音楽で頑張っている方、それはそれでよいと思います。あまり地域との関わりのない方が、自分も1回行ってみようかなと思えるような、子ども会の活動だとかガールスカウト、ボーイスカウトとかも含めて、いろんなイベントに参加してくれる、そういうふうになっていくとよいと思っております。

以上です。

○永井座長 ありがとうございます。とても貴重なお話が伺えたと思います。

それでは、もう一人、少年少女団体協議会の茨田委員から、お話いただけますでしょうか。

○茨田委員 大田区少年少女団体協議会の茨田と申します。

大田区少年少女団体協議会は、ボーイスカウト、ガールスカウト、大田区海洋少年団で形成している組織でございます。

これは、加盟委員というのがありまして、募集をして登録をして会費を払って制服を着ると、少年野球チームやサッカーチームでも同じような制度に基づいてなされていると思います。

その中で、自分たちの年間の活動を幾つか挙げますと、子ども交歓会、これは年に1回、例えば平和島公園とか、せせらぎ公園とか、洗足池とか、そういったところで主にボーイスカウト、ガールスカウト、海洋少年団のリーダーたちが計画を立てて、各学校にこういうイベントがあるから、ぜひ参加していただきたいということで、情報を提供して集まっています。

今年も2月に行われたのですが、まだまだコロナが完全に収まり切っていない状況だったもので、普段は朝から始まるのですが、午後からの開催となりました。

また、ガーデンパーティーといって、今は青少対の活動ですけど、かつては大田区少年少女団体協議会が教育委員会の社会教育課から受託しておりました。その後、青少対の活動となり、会場が増えたり、参加も規模も大きくなったもので、今は協力団体として参加いたしております。

あと、多摩川河川敷清掃奉仕、これも六郷土手とか、多摩川大橋とか、それからあとガス橋とか、そういうところに地元の区民の皆さんとか、それから地元の企業の方、そういう人たちが集まって、みんなで多摩川をきれいにしましょうという運動にも参

加しております。

8月には、今は行われていないですけれども、全国的に道路月間ということで、蒲田の商店街をパレードしたこともございます。

そのほかに、コロナ前までは、大田総合体育館で「障害者の日のつどい」というのがありました。ガールスカウトは体育館に来られた方たち、障害をお持ちの方たちのエレベーターの乗り降りをお手伝いさせていただきました。今は体育館では開催されておりませんが、それに代わったものは障害福祉課で行われております。

あと、今度のOTAふれあいフェスタですね。今度の土・日にありますけど、産業プラザP i Oができる前、更地だった頃に、私どもがブルーシートを敷いて、そこに手づくりだとか、こどもさんたちとゲームをやったりして地域の皆さんとこどもさんたちと、いろいろと交流を深めました。それが今や区で一番大きなイベントにまで成長することができて、すばらしいことだなと思っています。

本当にひきこもりで外にも出られない、もしかすると、ひきこもりになりそうな子どもさんたち、いろいろな課題があるかと思います。リーダー講習会に参加できているこどもとか、それからフラットおおたに、そういうところに行って、いろいろと苦悩だとか、そういったものを打ち明けながら、これからの人生を開いていこうという意欲のあることは、非常に先が明るいこどもとして希望が持てるのですが、ひきこもりの方をどのようにすれば、ほかのこどもさんたちと一緒に楽しく豊かな生活ができるようになるのかということが、我々の大きな課題の一つであると思います。

そのために、今日の資料の中でも、資料3の84ページ、この文章は非常にいいなと思っています。区民相互の絆を深める、地域力を高めるということで、様々な地域活動への参加のきっかけを提供していく。情報提供がないと本当に自分一人だなと思ってしまいます。何かきっかけを提供することによって、じゃあ、これに行ってみようとか、そんなようなことが開かれてくると思います。

組織に入っているこども・若者は行事に参加する機会が多いのですが、未加入の縁の薄い子たちはどうしても参加する機会がないから、本当に何かそういう機会が適切であればいいと思います。

それには、私たち指導者たちがみんな連携しあって、それぞれ皆さんのいいところを、それぞれ特徴を持っていますので、そういうところを出し合って、開拓していく必要性が迫られているのではないかと思います。

一番大事なのは、やっぱり情報を提供して、そして本当に困っている方たちに声をかけてあげる、それによって参加のきっかけが得られるのではないかなと思います。

何しろ若者は将来がある、未来があると言われていています。それから、仮に失敗しても再チャレンジすることができる、友達もいる、いろいろと相談することもできる。

時間があるということは若者にとっての、一番大きな特権かなと思います。よりよい活動を切り開いていって、人間味のある生活を送ってもらえればと思っております。大分、持論が占めましたけれど、そんなことでちょっとお話をさせていただきました。

○永井座長 ありがとうございます。

それでは、若者の当事者として公募委員の東使委員、いかがでしょうか。

○東使委員 ありがとうございます。

改めまして、東使と申します。ご存じの方もいるかもしれませんが、私は今回2期目としてここにいさせていただいております。よろしく願いいたします。お話を聞いて、3点ほどお伝えしたい意見と質問がございますので、一つずつお話ししたいと思います。

結論ですが、やはり私が思っていることとして1点述べさせていただくと、青少年の問題は青少年が解決すべきだと思っています。それが結論と思っています。青少年が解決すべきというのは、青少年だけが解決すべき問題ではないということは重々承知ですが、そこに青少年がいるということが何よりも大事と思っております。

その結論の上で、1点目からお話ししますが、コミュニティスクールのお話、大変参考になりました。この点に関して、私は今23歳ですが、8年ぐらい前までは中学生だったので、そのときの話をしたいと思います。私は中学校で生徒会長をやっております、まさに先ほどの地域の方とのつながりが、なかなか難しいということが現にありました。先生とやり取りをして、いろいろ企画し、イベントを行うにあたっては、やはり地域の方とのつながりを作ることが生徒側から言ってもなかなか実現できなかったもので、これができたらすごく大きなことだなと思っています。

当時、中学校の校長先生が言っていた話があるのですが、東日本大震災が起きてまだ2年、3年のときで、中学生になったときに、多くの校長先生が地域の人を助けるのは中学生だと話をされていました。小学生までは自分たちが逃げることを考えるようにと言われていましたが、中学生になった瞬間に、地域の人を助けろと言われてますが、地域の人としゃべったことが全くない。そのような状況下で、震災が起きて地域の人

を助ける、おんぶして避難所まで連れてくるようにと言われても、誰一人行動できないだろうと、当時すごく思っていました。なので、普段からの地域の人とのつながりというのは、震災や災害のときに非常に役に立つと思っているので、継続してやっていただきたいと思っています。

ただ、ぜひ平等に全ての学校でできるようにしてほしいという願いがあります。私は生徒会の集まりや海外派遣にも行っていたので、他の中学校の生徒としゃべる機会があったのですが、当時もその地域差といいますか、そういう活動をよくやっている地域とそうじゃない地域があったように思いました。ぜひこのお話しいただいた例を他の中学校でもできるとすごくよいと思っています。

その中で、先ほども学校運営協議会の中で大学生が委員をやっているという話がありましたが、私自身もこの青少年問題協議会の公募委員を大学生のときからやり始めました。自分の周りでも、こういったことに対して積極的に参加したいという人はすごく多かったです。ただ私自身もですが、都外の高校に行ったので、急に大田区とのつながりがなくなるということがありました。友達も地元よりも高校の友達、大学に入れば、より大学の友達と遊ぶようになります。大田区とのつながりがどんどん薄くなるのは、受験が影響すると思っています。そういったところから、参加してくださっている中学生や高校生の方のつながりを大切に、そこから次につながる形が模索できるとよいと思っています。

その中では、青少年問題協議会も、青少年がもっと関わるべきだと思っています。どういった形でできるのかは分かりませんが、何か分科会のような形でもって、青少年がメインとなった会をやっていただき、その意見を吸い上げて議論できたほうが、よりよくなると思っています。

2点目へいきたいと思います。2点目が、マジョリティーに対して、どう働きかけたらよいのかという話ですが、これも実体験の話を1点させていただくと、中学校の生徒会長をしていたときに、清掃ボランティアというのをやっていました。当時清掃ボランティア参加者は全校生徒240人中の10人もいない人数で、毎年何となくやっていました。私はそれがすごく問題だな、もっとうまく活用したいなと思い、ゲーム性を持たせたり、クラス対抗みたいな形にしました。結果的に240人中の100人ぐらいが参加するようになりました。

そのときにすごく思い出深いことがありました。僕の友達で中学校に入学してから

不登校になってしまった友達がいたのですが、それをきっかけに朝だけ学校へ行って、清掃ボランティアが終わったら帰るような感じになり、そこからちょっとずつ学校に行けるようになって、結果的に学校に通うことができるようになりました。

何か、そういった形で、実際に中学生、高校生、大学生がやることによって、大人ができないことも、つながりをもたすことができることは実際にあると思います。そういったところと連携しながら、コミュニティスクールをやれたらいいと思いました。

そして、最後3点目になりますが、データの活用の話になります。ここに関してですが、1期目の公募委員の際も感じておりましたが、施策などを評価している者が大人であることにすごく違和感がありました。というのも、青少年に対して、例えば重点施策がどれだけ周知されているかと言われると、周知度はかなり低いのではと思っております。私もこの委員になって、始めて知った施策等もたくさんありました。

こういった青少年に対して、どれだけ認知が図れているのかというところを効果測定していくのは絶対大事と思っております。そこを学校でも取り組んでいただき、毎年アンケートを行うことでアンケートから事業に対して興味を持つ人も増えてくるのかなと思っております。

フラットおおたも1,700件ぐらい相談に来ているという話で、私自身も一度フラットおおたでお話しさせていただいたことがあったのですが、開設から1年で1,700件という数字はすごいと思います。しかし、フラットおおたができる前に、もしかしたらそれ以上の相談件数が、別のチャンネルを通して相談が来ていたかもしれないと思っています。もしかすると、前にはもっと多くの相談件数があって、それが散らばっていたという事実があるのかもしれないと思っています。なので、そういったデータをしっかり取っていただいて、精査するのが大切かなと思っております。

そこでは、先ほどもいろいろ事例でLINEを活用されているという話があったのですが、実際に、例えばLINEで言いますと、私よりもっと若い世代になってくるとLINEを使っていない方も実は増えてきています。LINEというのは開封率が高いものの、アクションにつながりづらいみたいなところもあります。LINEが本当に最適なのかということも考えつつ、大田区全体でやっていったほうがよいと思います。

また、3月に引っ越しをしたのですが、そのタイミングで、大田区の情報はいくらも入ってこなかったです。ごみの情報や避難所の情報は出てきますが、そこに大田区の情報はこのLINEのQRコードから発信していきますよというものがあれば、新し

く大田区に来た人にも簡単に情報を届けることができると思いますし、そういった精査をしながら正しく情報提供できたらいいのかなと思っています。話が長くなりました。以上です。

○永井座長 ありがとうございます。

そうですね。評価をする際に、大人の視点からの評価が中心とならざるを得ないようなところもあるのだけれど、それは当事者の側から言うと違和感があるというのは、とても大事な視点だと思います。

情報の解釈の問題もありました。1, 700件で確かに立派な実績ですが、それまでそういうものがなかったのかということ、そうでもないじゃないかということ、その辺の分析も必要じゃないかということ、最近の若い方々はLINEもそんなに使わないという傾向も出てきていますよということも伺っており、とても有益なことだと思います。ありがとうございます。

それでは、他の委員の方からも、いろいろとご意見をいただきたいと思いますがいかがでしょうか。

○野田委員 日本工学院の野田です。

先ほどからご意見を拝聴していて、特にコーディネーターの方の発言に大変感銘を受けました。しかし、うちに入ってくる学生たちは18歳で成人ですので、悩みが深刻というのが感じられ、うちの生徒たちの悩みの話はかなり乖離があるなと感じました。それだけ年齢が高い分、何かしら考えることが多いのだと思います。

それから、学生の貧困というのが、結構顕著になってきているように感じます。皆様方が学生時代の学食の平均の値段というのは、250円とか300円だったのですが、今うちの学食に行ったら500円が当たり前です。学生たちのアルバイト料金はそんなに変わらないので、生活が大変だろうと思います。学生は、学費が払えないから奨学金の借入比率が高くなっている、勉強以外にアルバイトもしないといけない場合など様々な理由からとても忙しいです。奨学金の場合は入学した時点で借金を抱えているわけですから、ある意味、貧困というものが潜んでいると思います。このような貧困は、少年時には顕在化しなかったものの、青年時に表面化してくるような気がします。これが1点目です。

次に、学生の行動を見ていると、授業以外はほとんどSNSを使用しております。スマホを放さない中そのスマホを剥がして、地域のイベントに参加させるのか、スマホ

を放さないのであれば、そこにプッシュ型の情報を入れていくのかで地域のイベントの広報の仕方は変わってくるような気がします。待っているだけでは、うちの学生は参加しないと思います。したがって、何かしらプッシュ型で、例えばスマホのアイコンに何か大田区のイベントがあって毎回情報が来るようにする。そうすると彼らは開けます。開けても関心なければ行動しませんけれども、でも開けるということ自体が必要だと思います。ですから、LINEもそうですけども、SNSの活用というのを今後もっと重点的に行っていたほうがよい気がします。

以上です。

○永井座長 ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。お願いします。

○岡田委員 公募委員の岡田です。よろしくお願いします。

とても熱いコーディネーターの方からお話を伺い、よい事業だなと思ったのですが、これを大田区全体に広げていくとなると、地域での格差が出てくると思います。その格差をどうやって埋めていくのかというところで、もし展望がありましたらお聞かせください。

○長岡教育地域力担当副参事 教育地域力担当副参事の長岡です。

コミュニティスクールの推進を担当しており、去年までは5校だったのが、今現在で14校となっております。私どもは令和8年度末までに、区内全小中学校に導入したいと考えております。

地域の特性に応じた学校づくり、地域に開かれた学校づくりに取り組んでまいりますが、例えば先ほど東使委員が言われました、青少年問題は青少年が解決すべきだ、とてもいい話だと思います。そのためには、大人同士だけでなく、大人と子どもが顔と顔の見える関係づくりが必要と考えております。

その中で、様々な人が様々な意見を言っていくわけで、地域の特性に応じたというのは、それが格差を生むことや、バラバラの学校づくりをするということに直結するものではないと考えております。例えば、本日もPTA連絡協議会の会長様がいらっしゃいますが、PTA連絡協議会などで話を聞いてとてもよいと思ったのは、隣がやっていることで、よいことだったらまねよう、どんどんまねてよいのだと、地域の特性だから隣と同じことをしてはいけないのではないのだと、むしろまねてみて、違った部分が出てくるのが地域の特性じゃないかというお話をいただいたときに、そのとお

りだなと思いました。

私どもはコミュニティスクールを推進していく中で、一番大事に考えているのは違う地区でこんな取組をしていますよ、こんな成功例、こんな失敗例がありましたよというのをどんどん繋いでいきまして、大田区全体がブラッシュアップしていければと考えております。もちろん、地域に偏在する特性というのはあるかもしれませんが、それぞれの地域の特徴を見つめ合っていく中で、地域の特性がくっきりとしてくるようなコミュニティスクールづくりをしていきたいと考えております。

以上です。

○岡田委員 ありがとうございます。

○永井座長 他にいかがでしょうか。お願いします。

○小林委員 ありがとうございます。中学校PTA連合協議会の小林です。よろしくお願いします。

東使委員が私の言いたいことを大分言ってくださいました。ここにこども代表がないということ自体がそもそもの問題と考えております。ここにいる皆様方の中で、まだ現役でこどもたちが小学校、中学校に通っている親の立場からすると、そこが一番大事と思ったのが正直なところです。

こういった会議の場では、地域の特性が出るのは大田区の良さでもありますが、どうしてもきれいな話ばかりお伝えいただくような形になってしまっています。じゃあ、この学校でこういうふうにやってみただけ、こういう軋轢が出たとか、そういったところも一緒に話していただいたほうが、それが自分たちの地域で生きるのではないかと思います。

特に、区民協働の面では、久原小学校は、地域と学校のつながりを作るために、ものすごい数のサマースクールのような講座を開催している学校です。そこに視察に行くと、通常の区民に加えて、地域の商店や、スーパーマーケットも関わっています。そこに、今度学校地域支援本部を入れていくことで、どのようにバランスをとっていくのかという時に、私は聞いていて、よいことばかりだけではなく、いろんな問題も出てくるのではないかという感じがします。

今まであった地域教育連絡協議会や、学校地域支援本部をどちらも消極的な形でなくなっていくのではないというお話ですが、そういったところも先ほどおっしゃっていたとおり精査し、どこがよくてどこがよくなかったかというところを答え合わせしな

いで、ちょっと言葉は悪いですけども、若干臭いところに蓋をしてみたいな形のやり方になってしまうと、どうしても、同じところで引っかかってしまい、仕方がないみたいなことが起きてしまうと思います。先ほど長岡副参事のお話にあったとおり、隣の学校、隣の地域のここをまねたらよくなるじゃないのみたいなところや、隣も同じ問題で悩んでいたよというところの共有も含めてやっていっていただくことが、特に我々小学校・中学校のPTAには、コミュニティスクールがよい形で浸透していくと思います。過去のところの精査、反省を生かすことを積極的にやっていただいたほうがよいのではないかと、先ほど両コーディネーターのすばらしい話を聞きながら、すばらしいなと思ったのですけれども、それに加えてもうちょっと駄目だったところも教えてほしかったなと思いました。

○永井座長 ありがとうございます。

他にいかがでしょうか。今のご発言に対してでもよいですし、他のことでも構いません。お願いいたします。

○溝口委員 皆さん、こんにちは。小学校PTA連絡協議会の溝口と申します。

洗足池小学校のPTAをやっております。我々保護者、あるいは子どもたちはここにいる委員の皆様には普段から大変お世話になっております。ありがとうございます。

私からはちょっと違う視点でお話したいと思います。座長からいただいたお題は、地域とつながらないことの問題、またマジョリティーの子どもたちが地域とつながるために工夫していることでした。

私は小学校PTAなので、小学生の子どもたちが地域とつながるとき、まず地域とは何だろうということになります。恐らく区の会議で地域というと、自治会・町会や青少年対のことだと思えますけれども、一保護者の立場からすると、地域の入口は、まず隣近所、同じマンションの大人、要は自分の親以外の大人が子どもたちの成長を見守る、手を貸してあげるというところからスタートしていくと思っています。

一方で、先ほど出ていたスポーツまつりのように、地域の行事、イベントに子どもたちが参加してくれるかどうかというと、大体毎年、同じような子どもたちが参加していると見えています。

それは何かというと、結局子どもたちが行事に参加するかどうかというのは、親が子どもに対して行ってきなさいというかどうかの違いだと思っています。そうすると結局、親が地域の人たち、周りの人たちとつながっているかどうかで決まってしまう

いるのが現実と思います。

私自身の話をすると、小学校PTA会長になる前の年、校外活動の委員長といって地域行事の参加ボランティアを取りまとめするところで、初めて地域のスポーツまつりに参加しました。その際にたまたま、同じ保育園のパパ友ママ友たちも参加しており、こんなに楽しい場があるのだということを知りました。初めての地域デビューみたいな形で取組を知って、そこからPTAに入りました。そのようなきっかけが必要だろうと思います。

実際、地域のスポーツまつりや地域の行事に来ている子どもたちは、うちの地域だと野球であったり、サッカーであったり、あるいは親が同窓生で地域の周りの大人とつながりがあったり、何かしらつながりがあるから参加しているのだと思います。そういうところからたどっていく、親をうまく巻き込んでいくところからスタートするのが近道なのかなというふうに、私は思います。

以上です。ありがとうございます。

○永井座長 ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか。

○小峰委員 こども文教委員長の小峰でございます。今日は、大変に意義のあるお話をたくさん聞かせていただきまして、ありがとうございました。

先ほど、私の住んでいる地域が好きというご意見がありましたが、私も自分が住んでいる大田区が大好きだと思いました。何で大好きになったのだろうと振り返ったところ、地域のために何かしたいと思い、その途中に大変なことがあっても仲間が認めてくれた、一緒に乗り越えたことで充実感や達成感があったことが思い出され、共感をさせていただきました。経験や体験というのは、すごく大きなものと思います。

一方、誰一人取り残さないという視点に考えたときには、やはりマジョリティーの話がたくさん出ていましたが、その場合は、コミュニティスクールのような、みんなおいで、みんな一緒に体験しようという、この取組が非常に大きな意義のあるものだという事も実感しました。

今孤立というと、親の孤立の問題もあります。朝のNHKの連続テレビ小説を見ますと、私が小学校の頃はお風呂屋さんがあって、そこがコミュニティであり、そこでいろいろな情報をもたらっていました。そういうことを考えると、現在は誰に相談していいかわからない親御さんもたくさんいる中で、発達障害のお子さんが8%で、3

5人学級で3人ぐらいいらっしゃる。そして、二次障害の鬱にもなるかもしれない、コロナ後の時代のことも考えていくと、やはり学校、保護者、地域のつながりというものの大切さを実感として感じています。

学校には、コミュニティスクールや先ほどの現場の声をもっと若者の声を聞いてほしいということも含めて、しっかりと応援していきたいと思います。

コーディネーターの方々が、それぞれの学校長、地域のカラーを活かしながらの取組をされると思いますが、先ほど長岡副参事から、隣の学校がそれをやったから、うちがやってもよいのだよという、その考え方は非常に大切だと思いますが、一方で、違うことをやることの学校長の勇気というのも大変重要だと思います。

違うことをやってもよい、もし失敗して課題が山積になっても、それは一つの成功へのプロセスだと、そのような温かい目、空気をつくることも、すごく大事と感じました。ありがとうございます。

○永井座長 ありがとうございます。その辺りのことも、時間があれば校長先生にも、ぜひ伺いたいところです。何かほかにもぜひというご質問、ご意見等あれば承りたいと思います。

○榊中委員 先ほど発言したのですけれども、子どもたちが例えばリーダー講習会などに参加しない子どもたちの中には、本当は参加したいのだけれども、弟、妹の面倒を見なくてはならないため、日曜日に地域のイベントに参加できない子どもたちもいます。

今、ここに頂いていますが、この先々計画を策定していくとのことで、抜粋でいただいている以外にもたくさんの資料があると思いますが、ヤングケアラー問題に関してのことも、ぜひ盛り込んでいただきたいと思います。

以上でございます。

○永井座長 ありがとうございます。

それでは、最後に鈴木区長、何かお気づきのことがあれば、ぜひ伝えていただきたいと思います。

○鈴木区長 皆様の本当に情熱あふれる活動に基づいたお話や公募委員の皆様や小中PTAの代表者様からのそれぞれ違った観点からお話をいただき、それらの意見をしっかりと次期の大田区子ども・若者計画に反映させなければならないということ、つくづく感じさせていただきました。

キーワードは、子ども・若者が地域とつながることができるようにする。子ども・若

者たちへの対応として、既に、町会・自治会、青少対あるいは様々な地域の団体も一生懸命やっけていただいております。それでも居場所が見つからないこどもたち・若者たちには、居場所づくりということでフラットおおたがあったり、不登校特例校みらい学園があったりというような形で、区としては様々な施策を展開しています。

この土・日曜日に、毎週のように地域の連合運動会や文化祭に出させていただいているのですけれども、本当にこどもたちがよく参加をしてくれています。その反面、それはPTAの会長さんからすると、いつも同じこどもたちだよと、だからこそそのPTAに参加をしてくれていないような親に対してどう働きかけていくとか、新たなそういった問題点や視点というのも今日の協議会を通じて、出てきたのではないのかなと思いました。

その中で、やはり大事と思ったのは、こどもの頃にいかにイベントに参加をしてもらって、楽しい思い出を持ってもらうのか。そのためには、これからの時代、SNSの時代のため、情報提供をいかにしていくのか、こういったことの大切さを今日、改めて感じさせていただきました。

最後に、大田区のすばらしさは、前区長が提唱してきた地域力だと思います。これをより強いものにしていくのは大事なことですし、地域のこどもたちへのつながりを広げていく、つながるためのツールを広げていくためにも、地域力推進部と教育委員会の今後より強力な連携、こういったものを区としてもしっかりとバックアップ体制を取っていくことが大事だにご意見を聞かせていただいて感じました。

貴重なご意見、本当にありがとうございました。私からは以上でございます。

○永井座長 ありがとうございました。

最後に、玉川副区長からもぜひお願いします。

○玉川副区長 本日はありがとうございました。

今日のテーマは、こども・若者と地域との結びつきというようなことを現状どう捉えるのか。それから、今後に向けて現時点の課題認識はどうだろうということで、精力的なご議論を賜ったと思います。

いわゆる地域の側からすると、これからの担い手になるこどもたち、これは宝でありますから、健やかな成長を願っていろいろな機会を設けて参加していただきたいということで、イベントを開催しているわけではありますが、そのところは本当に頭が下がる思いであります。

コロナ禍の中で、いろいろ難儀され工夫をされる中で、趣向を凝らした催し物を展開していただいているというところで、本当にありがたいと思います。そこで参加したこどもたちが、大人になったときに、その地域のこどもたちに向けて、担い手として取り組みたいというような好循環をどういうふうに生み出していくのかというのが大きな課題であります。

先週、青少年対策地区委員会の表彰式というのがあって、私も区長と一緒に出席してもらったのですが、担い手になってくださっている方々に対して区長と青少対会長から表彰していただく場ですが、そこで代表になった方がおっしゃっていました。自分が青少年委員になったきっかけは、こどものときのリーダー講習会に出たことということなので、いわゆるマジョリティーではないですけど、やはりきっかけがあって、参加してきて大人になりました。つい最近まで若者だった方が、大人の立場になられて表彰を受けたのですけれども、やはり地域の担い手になっている方々、この席には重鎮の方々も出ていらっしゃるのですけれども、その皆様と一緒にいる方々には、若い世代の方も担い手として脇を固められておまして、いろいろ工夫をされて今、運営されている状況が私も理解できました。

今日ご指摘の中で、こども・若者の意見というものも、大事だよ、それはおっしゃるとおりだと思っております。先般、国がつくったこども基本法の中でも、こどもの意見表明というのが新しい考え方として表されており、区政の中でもそういった実践をこれからやっていく必要があります。そういった意味では、コミュニティスクールは、大田区にとって大変重要な取組でございます。

国の関係法令が改正されて、全国的な制度ではありますけれども、できることからやっていけるよう、大田区では小黒教育長のご指導の下で、地域と共にある学校、これを目指して取り組んでいるところでございます。

今日、発表にあった中で、やっぱりよいなと思うのは、生徒や学校が主体で、地域はそれをサポートするというような役回りをしている、この考え方の根底には、達成感や自信をしっかりと大切にするというようなお話があって、とてもいいなと思っております。そういった経験をしたこどもが将来、担い手になる一つのきっかけにもなるのかなど、それがコミュニティスクールであればなおよいと伺っていて思いました。

今後マジョリティーという部分に向けては、大田区も三木委員から話がありましたとおり、夏休みなどの長期休暇のときのこどもたちの居場所をどうするか、これはフラ

ットおおたもそうですけれど、中高生の居場所づくりというのにも取り組んでおり、いろいろな仕掛けを通じて、ここに参加している方々が連携を図りながら、こどもたちを見守り、次の担い手そして地域とのつながりを、今以上に太くする、そのようなことを庁内や学校、それからここにいらっしやる関係団体の皆様の意見交換と連携の中で大田らしさをもって、こどもの子育て環境をつくっていければと思いました。

皆様、発言のまとめになったかどうか分かりませんが、今日はありがとうございました。

○永井座長 ありがとうございます。

本日、皆様からいただいたご意見につきましては、事務局でまとめさせていただきます。

それでは、審議を終了させていただきます。長い時間、大変ありがとうございました。事務局から連絡事項がありましたらお願いできますでしょうか。

○今岡地域力推進部長 皆様、大変たくさんのご意見を本日は大変ありがとうございました。

事務局側といたしましても、大変勉強になることが多くございました。分科会というようなご提案もあり、若者に参画していただく形も考えていきたいと思っています。

区の出組として、1月の「二十歳のつどい」に向けて、10人の実行委員の方々が定期的に集まってくださっています。本当に前向きに参画してくださっており、そういったことをヒントにしながら続けていきたいなと思いました。

また、最後に榊中会長からヤングケアラーの話がありましたが、区ではヤングケアラーの実態調査を11月から行うということになっています。

3月には、まとめの報告書ができるということになっておりますので、今後もこの協議会でも報告していきたいなと思っておりますので、よろしく願いいたします。

事務局からですが、今後の日程でございます。

次回は、年明け令和6年2月2日、金曜日の午後1時、場所はこの会場、同じ場所でございます。こちらで開催をいたします。通知につきましては、後日改めてお送りさせていただきます。

本日は、大変長い時間、本当に貴重なご意見をありがとうございました。

以上で閉会とさせていただきます。

午後3時40分閉会